この一〇年、東アジアでは個人映像の制作が、質・量ともに急激に盛り上がっている。かつて冷戦の対立の時代には、政府や宣伝機関が特権的にプロパガンダの道具としてきた状況は一変し、題材とスタイルの多様化が進み、いまやもっともしなやかな感覚で、「いま」をとらえるツールとなっている。

デジタルカメラとパソコンがあれば、個人が映画を作ることのできる時代に、東アジアの若い創作者たちは、日常からなにを切り取ろうとしているのだろうか。いまも残る伝統的な価値観や制度としての検閲、経済的な負担など、さまざまな制約の中で、個人映像から社会を見つめる豊かな可能性が、この連続講義のテーマとなっている。

東アジアの新進ドキュメンタリーの作り手と、その国の批評家をゲスト・スピーカーに迎えて、作品鑑賞と講演、討論を組み合わせる。

見ることの意味を問い、東アジアの「いま」を考える

「ショート・ジャーニー」（タイ／2003年／タノン・サッタルーチャウォン監督作品）

東京大学教養学部前期課程 2006年度夏学期　EALAIテーマ講義

東アジアのドキュメンタリー映画

個人映像から見える社会

4	13	イントロダクション
	20	〈韓国ドキュメンタリーの復権〉キム・ドンウォン――『送還日記』監督
	27	〈ベトナムと中国：社会主義国にドキュメンタリーは可能か〉刈間文俊――東京大学教養学部教授
5	11・18	〈個人的なことは政治的なこと〉ミッキー・チェン――『美麗少年』監督、ゲイ・アクティビスト
	25	〈ドキュメンタリーとフィクションの狭間〉門林岳史――日本学術振興会特別研究員
6	1	〈マスメディアが伝えきれない現実〉ヤン・ヨンヒ――『Dear Pyongyang』監督
	8・15	〈中国でインディペンデンスの意味を問う〉クリス・ベリー――英国ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ教授
	22・29	〈パーソナル・ドキュメンタリー、家族、身体〉ナム・イニョン――韓国ドンソ大学教授
7	6	〈ペンのようなビデオ〉森達也――『A』『A2』監督
	10	〈いま記録しなくては消えてしまう〉李一凡（リ・イーファン）――『水没の前に』監督
	18	〈アーカイブを使った社会批評〉佐藤真――『阿賀に生きる』、『Out of Place』監督

※予定は都合により変更する場合もあります

木曜5限 16:20-17:50
学術交流ホール

担当教員
刈間文俊

協力
藤岡朝子　山形国際ドキュメンタリー映画祭 コーディネーター

連絡先
東アジア・リベラルアーツ・イニシアティブ（EALAI）
admin@ealai.c.u-tokyo.ac.jp
http://www.ealai.c.u-tokyo.ac.jp